

プロジェクトについて

2017年夏、国立新美術館、森美術館、国際交流基金アジアセンターは、東南アジアの現代美術の発展を80年代から現代まで再読する展覧会を3者共催で開催いたします。

キュレトリアル・チームには、国立新美術館および森美術館のキュレーターに加え、1980年代以降に生まれた東南アジアの新しい世代のキュレーターが参加しています。展覧会の内容について議論を重ねるなかで、都市化や近代化が進行する一方、地方都市や地域コミュニティの文化や記憶の維持・再発見へ向けたコレクティブな活動、公的な現代美術への制度的支援が未発達な状況で、自ら変化をもたらそうとするDIY的でパフォーマティブな活動、各地域でのこれまでの近現代美術の発展をアーカイブ化し、次世代へ継承していく活動などが、展覧会を構成する重要なテーマとして浮かび上がっています。

2015年度から2017年度にかけて、東南アジアの現地調査を継続しつつ、各地域、分野の専門家との知的交流も深めながら、極めて多様な道を辿ってきたこの地域の現代美術を、日本の観客といかに共有できるかを模索していきます。

プロジェクトの一環として、展覧会開催までのプロセスやその過程で得た情報を公開することを目的に、本ウェブサイトを立ち上げました。東南アジアの美術の動向を知っていただきながら、展覧会がどのような議論・過程を経てつくられていくのかを共有できれば幸いです。

プロジェクト・タイトルについて

「SEAプロジェクト：東南アジアの現代美術—1980年代から現在まで」は展覧会の名前ではなく、展覧会開催までのプロセス（調査やイベント、企画会議等）の総称、プロジェクト・タイトルとして使用しています。

展覧会概要

タイムライン

主催者

キュレトリアル・チーム

「サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」 展覧会概要



ジョンペット・クスウィダナント 《言葉と動きの可能性》
2013年 原動機のないモーターバイク、布旗 サイズ可変
所蔵：森美術館

国立新美術館、森美術館、国際交流基金アジアセンターは、ASEAN（東南アジア諸国連合）設立50周年にあたる2017年、国内過去最大規模の東南アジア現代美術展、「サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」を開催します。2014年から展覧会開催までのプロセス（調査やイベント、企画会議等）をプロジェクトととらえ進めてきた「SEAプロジェクト」が送り出す展覧会となります。

タイトルになった「サンシャワー（天気雨）」は、晴れていながら雨が降る不思議な気象で、熱帯気候の東南アジア地域では頻りにみられます。また、植民地主義以降20世紀後半、冷戦下の戦争、独裁政権を経て近代化や民主化を迎え、近年では経済発展や投資、都市開発が進むなど、さまざまな政治的、社会的、経済的变化を遂げてきたこの地域の紆余曲折とその解釈の両義性に対する、詩的なメタファーでもあります。

多民族、多言語、多宗教の東南アジア地域では、じつにダイナミックで多様な文化が育まれてきました。本展では、自由の希求、アイデンティティ、成長とその影、コミュニティ、信仰と伝統、歴史の再訪など、東南アジアにおける1980年代以降の現代アートの発展を複数の異なる視点から掘り下げ、国際的な現代アートの動向とも照らし合わせながら、そのダイナミズムと多様性を紹介します。

●会期

2017年7月5日（水）～10月23日（月）

●会場

国立新美術館 企画展示室2E（東京都港区六本木7-22-2）

森美術館（東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー 53F）

●主催

国立新美術館、森美術館、国際交流基金アジアセンター



コラクリット・アルナーノンチャイ 《おかしな名前の人たちが集まった部屋の中で歴史で絵画を描く3》

2015年 ビデオ 24分55秒

Courtesy: Carlos / Ishikawa London; Clearing Brussels / New York

タイムライン

「SEA PROJECT: Contemporary Art from Southeast Asia 1980 to Now」では展覧会の準備過程と進捗状況を本ウェブサイトで公開していきます。

このページでは、これまでのプロジェクト・プランを更新していきます。

2017

2017年7月5日

開幕

「サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」ついに公開！

2017年1月22日・29日

特別上映会：映画から見るシンガポール・マレーシアのアイデンティティ

展覧会を構成するセクションのひとつである様々なアイデンティティの問題を扱った、シンガポールとマレーシアの映画を上映しました。

2016

2016年12月21日-22日

企画会議04

キュレトリアル・チーム全員が東京に集まり、作家・作品・展示デザインなどの最終調整を行いました。

2016年11月8日-11日

調査出張09: シンガポール

シンガポールでの調査第2回目。

2016年9月25日-29日

調査出張08: ブルネイ・ダルサラーム、マレーシア

バンドルスリブガワン、クアラルンプールの調査第2回目。

2016年9月24日

ヘリ・ドノによるパフォーマンス&トーク+SEAプロジェクト報告：インドネシア編

プレイベント第2弾として、インドネシアを代表するアーティストのヘリ・ドノによるパフォーマンスとトーク、キュレーターによる「インドネシア現代アートの今」について報告を行いました。

2016年5月23日-27日

企画会議03

キュレトリアル・チーム全員が東京に集まり、タイ調査のまとめ、作家・作品選定、展示デザイン構成等について議論しました。

2016年5月6日-13日

調査出張07:タイ

バンコク、チェンマイの調査

2016年2月28日 - 3月2日 (予定)

企画会議02

キュレトリアル・チーム全員が東京に集まり、2015年度の調査のまとめ、展覧会コンセプト、2館の構成、作家・作品選定等について議論。

2016年2月27日

SEA PROJECTシンポジウム01

「日本は東南アジアの現代美術にいかに関わってきたのか？」

1980年代以降日本がいかに東南アジアの現代美術を研究・紹介し、どのような議論を展開してきたのか、また日本のパフォーマンス・アートが東南アジアでどのような役割を果たしてきたのかを改めて検証します。

2016年1月21日 - 28日

調査出張06: シンガポール、カンボジア、ラオス

シンガポール、プノンペン、ピエンチャンの調査。

2015

2015年12月13日 - 20日

調査出張05: ベトナム

ハノイ、ホーチミンの調査。

2015年11月13日 - 23日

調査出張04: インドネシア、オーストラリア

ジャカルタ、スラバヤ、ジョグジャカルタ、ブリスベン、シドニーの調査。

2015年10月24日 - 28日

調査出張03: ミャンマー

ヤンゴン、マンダレー調査。

2015年10月15日

勉強会05: ミャンマー

出張前に、ミャンマー美術について予習。

2015年8月2日 - 3日

企画会議01

キュレトリアル・チームが初めて全員集合して企画会議を開催。1日目は、東南アジアのキュレーターズに各国の美術状況について発表。2日目は展覧会の枠組みについて会議。

2015年7月29日

勉強会04：ベトナム現代美術について（ゾーイ・バット氏）

キュレトリアル・チームが初めて全員集合して企画会議を開催。1日目は、東南アジアのキュレーターズに各国の美術状況について発表。2日目は展覧会の枠組みについて会議。ホーチミン（ベトナム）にあるオルタナティブ・スペース、サン・アートのディレクター、ゾーイ・バット氏からベトナムの現代美術についてのレクチャー。

2015年6月22日

勉強会03：ヴァンディー・ラッタナ、カニータ・ティス

カンボジアの現代作家、ラッタナ氏とティス氏に、自身の美術制作についてインタビュー。

2015年2月4日 - 11日

調査出張02：ブルネイ・ダルサラーム、マレーシア

バンドルスリプガワン、コタキナバル、クアラルンプールの調査。

2015年1月8日 - 12日

調査出張01：フィリピン

マニラの調査。

2014

2014年12月5日

勉強会02：フィリピン、マレーシア

出張前に、フィリピン、マレーシアの美術について予習。

2014年11月6日

勉強会01

過去の基金の東南アジアに関する展覧会について

2014年夏から冬にかけて

共催者による協議。各館のキュレーターや担当者が東京に集まり、展覧会共催の可能性について議論を重ねる。

主催者

国立新美術館



2017年には六本木で東南アジアの現代アートの大規模な展覧会が開催されます。

国立新美術館と森美術館、そして国際交流基金が共同で主催者となって開催する展覧会で、東南アジア（ASEAN）10か国の現代アーティストを選び、両館の展示室を使って行うものです。すでに二つの日本を代表する美術館のキュレーターたちが各国を精力的に回ってアーティストたちに会い作品を見て準備を進めています。六本木をアジアのアートで埋めよう。オリンピック・パラリンピック開催に向けての企画の一つでもあります。皆さん、乞う、ご期待！

青木 保
国立新美術館 館長

森美術館



この度、国立新美術館、国際交流基金及び森美術館は、三者共催事業として、2017年に東南アジア10か国を対象にした現代美術の展覧会を開催する運びとなりました。現在、それぞれの組織のキュレーター・専門家と現地の若手キュレーターが協働により、活発に調査作業を行っています。本展が、東南アジア地域の現代美術をより多くの観客の皆さまに紹介し、日本との相互理解と交流を促進することで、共にアジアの未来を考える機会となれば素晴らしいことだと思います。

南條 史生
森美術館 館長

国際交流基金



この度、国立新美術館、森美術館の2館同時開催というかつてない規模で東南アジア美術を紹介する展覧会を共催できることは、国際交流基金にとっても大きな喜びです。本プロジェクトでは、両館のキュレーターに加えて、東南アジア地域からも4名の若手キュレーターを迎えて準備をすすめています。国籍も年齢もキャリアも多様なキュレーター・チームがどのような議論を経て展覧会をつくりあげていくのか、開催までの過程を本ウェブサイトでお楽しみいただきながら、東南アジアの美術の動向とともに、それぞれの地域の歴史や文化に対する理解を深めるきっかけとなれば幸いです。

安藤 裕康
国際交流基金 理事長

キュレトリアル・チーム

本プロジェクトでは、国立新美術館、森美術館のキュレーターに加え、東南アジアで活動している
インディペンデント・キュレーターが4名参加。



荒木 夏実
森美術館
キュレーター



マーヴ・エスピナ
アーティスト/
インディペンデント・
キュレーター



片岡 真実
森美術館
チーフ・キュレーター



喜田 小百合
国立新美術館
アソシエイト・フェロー



近藤 健一
森美術館
キュレーター



熊倉 晴子
森美術館
アシスタント・キュレーター



ヴェラ・メイ
インディペンデント・
キュレーター



南 雄介
国立新美術館
副館長兼学芸課長



武笠 由以子
国立新美術館
研究補佐員



オン・ジョリーン
インディペンデント・
キュレーター



グレース・サンポー
インディペンデント・
キュレーター



徳山 拓一
森美術館
アソシエイト・キュレーター



椿 玲子
森美術館
アソシエイト・キュレーター



米田 尚輝
国立新美術館
研究員

荒木 夏実

森美術館
キュレーター

パリ[フランス]生まれ。1994年より三鷹市芸術文化振興財団でキュレーターとしての仕事をスタートし、2003年より森美術館勤務。2010年より慶應義塾大学非常勤講師。ソウル市美術館での「シティ・ネット・アジア 2009」展では共同キュレーターを務める。森美術館での企画展に、「ストーリーテラズ：アートが紡ぐ物語」展（2005年）、「六本木クロッシング 2007：未来への脈動」（2007年）、「小谷元彦展：幽体の視覚」（2010年）、「LOVE展：アートにみる愛のかたち」（2013年）、「ゴー・ビトゥーンズ展：こどもを通して見る世界」（2014年）など。「ゴー・ビトゥーンズ」展で第26回倫雅美術奨励賞（美術評論部門）、第10回西洋美術振興財団賞を受賞。横浜市在住。

マーヴ・エスピナ

アーティスト／
インディペンデント・
キュレーター

マニラ [フィリピン] 生まれ。フィリピンで最も歴史のあるアーティスト・コレクティブ、グリーン・パパイヤ・アートプロジェクトのプログラム・ディレクターを務め、またメディア・アートのキッチン及び毎年実施される「Festival of the Recently Possible」祭を開催している WSK の管理人も兼務。マニラとサイゴンを拠点に活動している institute of Lower Learning(iLL)の共同設立者。2014年からは、アーティストであるシリーン・セノとのコラボレーションによる「カランパグ・トラッキング・エージェンシー」というアーカイブ・プロジェクトを開始。フィリピンにおける映像制作についての調査、オルタナティブな視点を模索するものであり、フィリピン国内外で成果を発表している。また、美術と経済、価値と労働などの課題を追求した企画展、「HOLDINGS」が2014年度の国際交流基金主催の若手キュレーターの育成ワークショップ、「Run & Learn」の成果展覧会として選出され、フィリピン大学付属ヴァルガス美術館で展示された。マニラ在住。

片岡 真実

森美術館

チーフ・キュレーター

愛知県生まれ。民間シンクタンクで文化政策・都市開発と芸術文化プロジェクトに関する調査研究を行った後、1997年から東京オペラシティアートギャラリー・チーフキュレーターを勤め、2003年より森美術館勤務。2007年から2009年はロンドンのヘイワード・ギャラリーにてインターナショナル・キュレーターを兼務し、さらにゲスト・キュレーターとして「Phantoms of Asia」展（サンフランシスコ・アジア美術館、2012年）や共同芸術監督として第9回光州ビエンナーレ（2012年）を企画。森美術館での企画展に「アイ・ウェイウェイ展－何に因って？」（2009～2014年）、「会田誠展：天才でごめんなさい」（2012年）、「イ・ブル展：私からあなたへ、私たちだけに」（2012年）、「六本木クロッシング 2013 展：アウト・オブ・ダウトー来るべき風景のために」（2013年）、「MAM リサーチ 002：ロベルト・チャベットとは誰か？」（2015年）など。東京都在住。

喜田 小百合

国立新美術館

アソシエイト・フェロー

京都市生まれ。ギャラリー勤務などを経て、香港中文大学大学院の修士課程（Cultural Studies）で、主にアジア美術におけるアーカイブの問題について研究。香港のアジア・アート・アーカイブ（AAA）やインドネシア・ヴィジュアル・アート・アーカイブ（IVAA）などの調査を行う。2016年より国立新美術館勤務。東京都在住。

近藤 健一

森美術館
キュレーター

神奈川県生まれ。2003年より森美術館勤務。森美術館では、「MAMプロジェクト」シリーズにてジョン・ウッド&ポール・ハリソン（2007年）、小泉明郎（2009年）、山城知佳子（2012年）の個展を企画した他、「MAMスクリーン 001：ビル・ヴィオラ初期映像短編集」や「MAMスクリーン 002：ゴードン・マッタ＝クラーク記録映像集」などの映像作品上映プログラム（ともに2015年）を企画。「英国美術の現在史：ターナー賞の歩み展」（2008年）、「六本木クロッシング 2010 展：芸術は可能か？」（2010年）、「アラブ・エクスプレス展：アラブ美術の今を知る」（2012年）、「アンディ・ウォーホル展：永遠の15分」（2014年）を共同企画。2010年には、ローマの非営利ギャラリー、サラ・ウノで若手日本人のビデオ・アート展、「VIDEOZOOM: Giappone Re-inquadrare il quotidiano」展を企画。2014年から2015年には、ベルリン国立博物館群ハンプルガー・バーンホフ現代美術館客員研究員を務める。東京都在住。

熊倉 晴子

森美術館
アシスタント・キュレーター

東京都生まれ。2011年より森美術館勤務。「会田誠展：天才でごめんなさい」（2012年）、「六本木クロッシング 2013 展：アウト・オブ・ダウトー来るべき風景のために」（2013年）、「リー・ミンウェイとその関係展」（2014）、「ディン・Q・レ展：明日への記憶」（2015年）などのアシスタントを務める。月刊美術手帖において新人月評を担当（2013年）。国際交流基金主催の若手キュレーターの育成ワークショップ（ジャカルタ、2014年）、ICCキュラトリアル・インテンシブ（2013年）に参加。現在はグレース・サンポーとともに「MAMリサーチ 003：インドネシア・ニュー・アート・ムーブメント」（仮題）を準備中の他、アガサ・ゴス＝スネイプ（オーストラリア）のプロジェクトも進行中。東京都在住。

ヴェラ・メイ

インディペンデント・
キュレーター

ウェリントン [ニュージーランド] 生まれ。2011年から2014年までオークランド工科大学附属セントポール・ストリート・ギャラリーのアシスタント・ディレクターを務め、2014年から現職。2013年にはセントポール・ストリートギャラリーでアジア太平洋の視点から展覧会史の言説を模索する「From a History of Exhibition Towards a Future of Exhibition Making」と題したキュレトリアル・シンポジウムをビルジャナ・シリックと共同企画。「FIELDS: An Itinerant Inquiry across the Kingdom of Cambodia」展（2013年）や「The Disappearance」展（2014年）の共同キュレーター。セントポール・ストリート・ギャラリーとダウズ・アート・ミュージアムでの企画に、「In Spite of Ourselves: Approaching Documentary」展、「Assembly」展、「Local Time: Horatiu」展（全て2012年）がある。2015年から2016年には、ゲティ財団によるリサーチ企画、「Ambitious Alignments: New Histories of Southeast Asian Art」の研究員として参加。新しく刊行予定の学術誌、『Southeast of Now: Directions in Contemporary and Modern Art』の編集委員会の一員も務める。シンガポール在住。

南 雄介

国立新美術館
副館長兼学芸課長

鳥取県生まれ。東京都美術館、東京都現代美術館学芸員を経て、2004年4月より国立新美術館設立準備室に勤務、現在は副館長兼学芸課長。東京都現代美術館での企画展に、「中西夏之」（1997年）、「河原温：全体と部分」（1998年）、「MOT アニュアル 1999：ひそやかなラディカリズム」（1999年）、「村上隆：召喚するかドアを開けるか回復するか全滅するか」（2001年）、「横尾忠則：森羅万象」（2002年）、「再考：近代日本の絵画 美意識の形成と展開」（2004年）など。国立新美術館での企画に、「国立新美術館開館記念展 20世紀美術探検」（2007年）、「アーティスト・ファイル 2008—現代の作家たち」（2008年）、「光：松本陽子／野口里佳」（2009年）「与えられた形象—辰野登恵子／柴田敏雄」展（2012年）、「アメリカン・ポップ・アート」（2013年）、「中村一美」（2014年）など。横浜市在住。

武笠 由以子

国立新美術館

研究補佐員

埼玉県出身。東京芸術大学大学院美術研究科、ニューヨーク市立大学ブルックリン・カレッジおよびシティ・カレッジで抽象表現主義の画家、マーク・ロスコやアドルフ・ゴットリーブらについて研究。論文に「盲目の予言者としての芸術家像—マーク・ロスコ作《テイレシアス》の分析」（『Aspects of Problems in Western Art History』第9号、東京芸術大学、2011年）、「版画におけるオートマティスムの実践—スタンリー・ウィリアム・ヘイターの版画制作とシュルレアリスム」（『東京芸術大学美術学部論叢』第7号、東京芸術大学、2011年）、「アドルフ・ゴットリーブのピクトグラフにおける「目」と「英雄」のモチーフ—批評家たちとの応酬から」（『美術史』第179冊、美術史学会、2015年）などがある。2016年4月より国立新美術館勤務。東京都在住。

オン・ジョリー

インディペンデント・

キュレーター

イポー [マレーシア] 生まれ。2011年から2014年まで MapKL@Publika という美術・文化のオルタナティブ・スペースでプログラム・マネージャーを務め、毎年開催している MAP アート・フェスティバルのプログラムを担当し、アーティスト、作家、デザイナーや建築家など、100名を超える参加者と協働し、パブリック・アートのコムッションシリーズを共同キュレーションした。大衆文化、現代美術、フェミニズムなどの問題を課題に、クアラルンプールやペナンでプロジェクトを継続。2014年には、第8回ベルリンビエンナーレのプログラムの一部である若手キュレーターワークショップに選出され、国際交流基金主催の若手キュレーターの育成プログラム「Run & Learn」にも参加（2014年）。クアラルンプール在住。

グレース・サンボ

インディペンデント・
キュレーター

ジャカルタ [インドネシア] 生まれ。ジャカルタのアーティスト・コレクティブ、ルアンルパを通して 2006 年に美術に興味をもつ。ヴィジュアル・アート・スタディーズ研究のため、ジョグジャカルタへ移住。「ジョグジャ・ビエンナーレ IX: ジョグジャ・ジャミング」にてアーカイブを主体とした展覧会を、インドネシア・ヴィジュアル・アート・アーカイブ (IVAA) のコミッションによりキュレーション。ランガン美術財団のエグゼクティブ・ディレクターとキュレーターを 2010 年から 2012 年に兼任し、「How They Did Art Then」展や「REPOSITION: Art Merdeka!」展など 15 の展覧会を企画。2011 年にクローズドのディスカッション・フォーラム、「Hyphen」を共同設立。断片的なインドネシアの美術史をつなぎ合わせる試みを行い、リサーチおよびキュラトリアル・プロジェクトを手がけるようになる。ジョグジャカルタ・ビエンナーレ主催の「Equator Symposium 2012-2022」のプログラム・マネージャーを務めた。ジャティワンギ、ジョグジャカルタ、メダン [インドネシア] 在住。

徳山 拓一

森美術館
アソシエイト・キュレーター

静岡県生まれ。2012 年より京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA で学芸員として勤め、2016 年 4 月より森美術館に勤務。京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA での主な展覧会企画として、2016 年グイド・ヴァン・デル・ウェルヴェ個展「無為の境地」、奥村雄樹個展「な」、2015 年エレン・アルトフェストが出展した「The Hundred Steps」展、2014 年アピチャップン・ウィーラセータクン個展「PHOTOPHOBIA」、ミヤギフトシ 個展「American Boyfriend: Bodies of Water」、2013 年「京芸 transmit program #04 KYOTO STUDIO」等がある。国際交流基金主催の若手キュレーターの育成ワークショップ（マニラ、2014 年）に参加。平成 27 年度京都市芸術文化特別奨励者。東京都在住。

椿 玲子

森美術館

アソシエイト・キュレーター

滋賀県生まれ。2002年より森美術館勤務。森美術館では、「MAM プロジェクト」シリーズにて、サスキア・オールドウォーバース（2008年）、ジュール・ド・バランクール（2010年）、ホー・ツーニェン（2012年）、エムレ・ヒュネル（2013年）、ヤコブ・キルケゴール（2014年）の個展を企画した他、「シンプルなかたち展：美はどこからくるのか」（2015年）をアソシエイト・キュレーターとして企画・担当。他に、「アーキラボ：建築・都市・アートの新たな実験」展（2004年）、「アフリカ・ミックス：多様化するアフリカの現代美術」展（2006年）、「医学と芸術展：生命と愛の未来を探る」（2009年）、「フレンチ・ウィンドウ展：デュシャン賞にみるフランス現代美術の最前線」（2011年）などを担当。森美術館外では、「隠喩としての宇宙」展（タカ・イシイ・ギャラリー京都、ホテルアンテルーム京都、2012年）、「Duality of Existence: Post Fukushima」展（フリードマン・ベンダ・ギャラリー、ニューヨーク、2014年）などを企画。東京都在住。

米田 尚輝

国立新美術館

研究員

京都府生まれ。2007年より国立新美術館勤務。国立新美術館での担当展に、「『具体』—ニッポンの前衛18年の軌跡」（2012年）、「クレラー＝ミュラー美術館所蔵作品を中心に 印象派を超えて一点描の画家たち ゴッホ、スーラからモンドリアンまで」（2013年）、「アーティスト・ファイル 2015 隣の部屋—日本と韓国の作家たち」（2015年、2015-16年にかけて韓国国立現代美術館果川館へ巡回）など。論文に、「モンドリアンとファン・ドゥースブルフのグラフィック・イメージ」（『引込線 2013』、引込線 2013 実行委員会、2013年）、「ゾフィー・トイバー—1910 - 20年代のデザイン理論」（『NACT review 国立新美術館研究紀要』、国立新美術館、2015年）など。東京在住。

謝辞

本プロジェクトの実現に向けて多大なるご助言・ご協力を賜りました皆さまに心よりお礼申し上げます。

* 敬称略、順不同

ゾーイ・バット

ヴァンディー・ラッタナ

カニータ・ティス

モ・サ

バンドゥ・サンダー・アート学校の生徒たち

在ミャンマー日本国大使館

ジョン・クラーク

ヴェロニカ・ラドゥロヴィック

ジュダ・スー

スザンヌ・レヒト

国際交流基金 クアラルンプール日本文化センター

国際交流基金 マニラ日本文化センター

国際交流基金 ベトナム日本文化交流センター

国際交流基金 ジャカルタ日本文化センター

国際交流基金 バンコク日本文化センター

国際交流基金 アジアセンター プノンベン連絡事務所

国際交流基金 アジアセンター ビエンチャン連絡事務所